

本屋の変化生成

奈良 敏行

(笈の定有)

本の世界が縮んでいるとよく耳にする。メディアを通じてそんな危機意識が聞こえてくる。たしかに、足元でもたくさんの本屋が消えている。しかしそれと逆行して本のあつる場所は増えてきている。書店が淘汰され、カフェや雑貨店など、本来異業種だったところに「本の置き場」が増えている。

先日ある新聞社の文化部の記者の方とよもやま話をしているとき、そんな話をした。記者の方の話題は自分の故郷の小さな本屋がいつの間にか消えていたのに「ハッ」とした驚きだった。いろいろうかがっていると、その小さな本屋は教科書を扱っていたのではないかと想像した。教科書を扱う本屋は、ときには売場もなく倉庫だけで販売している本屋もあった。本屋の概念が変化生成するのを感じる。

鳥の目で「公」と「私」というものを考えてみる。地方の書店は、教科書を届けるという役割をになって始まったのではないだろうか。教育伝播のネットワークの中に生まれたのかもしれない。

当初、大書店は大学の研究室や図書館との取引を経営の基盤にしていたのだ。

「書店」には「教育」と「商い」という二つの流れがあったのだろうか。「私」の性格が大きくなると、「書店」という言葉が身に合わなくなる。それで身の丈に合わせて「本屋」という名が増えてくる。

そうして教育という大きな物語を届けるという使命感が薄れ、「私」からの発信が中心になってくる。すると個人が多様なように本屋の多様化になる。読者が簡単に本屋になる時代が始まる。

業界は縦軸(垂直方向)に見れば縮んでいる。しかし横軸(水平方向)で見れば、かつてない本屋の定義の拡大の時代となっている。

書店とは何か。何であったかということの主語にすれば、確かにその世界は縮んでいる。しかし、主語述語を反転させれば、つまり「本のある場所」を本屋、と認識を再構成すれば、面白い時代が始まっているのかもしれない。記者の方は、記事を、「本のあるところ」にはそれぞれの

「驚きがある」ということばで締めくくっていた。

わたしが時々通う喫茶店には、じわじわと本が増えていく。最初はその店の雰囲気を外側から補完する本からはじまったのだが、しだいに店主の本当に好きな本を並べるようになってきている。購入もできる。少数だが新刊の取引も工夫されている。

小さな商いは、お客さんの支えを必要とする。お客さんが、この店は自分にとって必要な居場所だと強く思うことが、お店を持続させる。小さなもてなしの一言、相手を受け入れる会話、そんな店主の思いやりがなくては小さな商いは成立しない。

本は「驚き」だ。本はそんなつながりを身代わりでやってくれる。店主の好みの本と、お客の好みの本が一心同体で並んでいる。きっとお客は自分はこのようにいいんだと思う。

小さな喫茶店。貴重な空間を退かせて、退いたところに本の置き場をつくる。本の置き場はこのようにして増えていく。

本屋と読者という個性の違いが、変化生成の中で、本に寄り憑かれた同一の「主体」として、新しい時代に向けて、新しい形態を孵化しようとしている、と思える。

わたしは本を商うということは、忘れてしまった。いい

本屋を作りたいという垂直の意志は昔のこととなった。喫茶店の人が空間を退かせて本を置くように、わたしは本屋の空間を退かせて「読書会」やミニコミ刊行の場所を作ってきた。自分の営みを内部で完結させずに外部を導き入れる、という共通の願いがそこにある。

そうして長い年月のうちに「本屋」という「商い」が完全に消滅し、「読書会」や『音信不通』というミニコミ刊行だけが持続している。「それからの定有堂」の「小さな一つの衝撃」だと思う。

この「驚き」と「衝撃」を、身近なある人が、「独学の芽を絶やさないためだね」と言った。「独学の芽」、それはわたしの「初発衝動」であり、「オブセッション」だった。最後に残ったのは、本を読みつづけるという欲望だけだ。目的はない。そして残された時間もない。

2026.20.13

2026.02.17